

新島襄先生永眠百年に際して

松 山 義 則

新島襄先生が天に召されてから一〇〇年の歳月がすぎました。先生は四十七歳にみたない短命のご生涯であられました。が、信仰に生き、キリスト教精神にもとづく教育理想をもつて同志社を創設され、高尚にして勇氣ある人生を歩みとおされました。同志社草創のときから、その開業は道けわしいものでありました。聖書の授業も容易ならぬに耐えて、その教育理想の実現に向けて活力ある日日をおくられました。個儻不羈なる生徒を愛してその一人ひとりのために祈り、教職員の間に対立に苦悩し、病羸の身をもつて学校経営のため募金に足脚されたのであります。先生は教育と伝道にすべてをささげ、自由教育、自治教会をめざし、キリスト教精神にねざす自治自立の人民、良心を手腕に運用する人物の養成を希求されました。

新島先生に親しく教えを受けた人びとのなかで松尾音次郎氏は、新島先生は眉はこく目はすずしく、眉目清秀、平衡のとれた体格、声は太き潤いがあり、堂々たる偉丈夫、歩かれるときは少し首をかたむけうつ向き気味であられたと述べています。また、徳富猪一郎氏は、先生は熱情の結晶、

よく泣き、よく悦び、よく怒り、よく哀み、よく勇んだ、そして意志の大塊であったと書いています。浮田和民氏も先生を回顧して、先生は人格に作り飾りがなく、普通の人と同じようであろうたえるときはうろたえ、煩悶するときには煩悶せられるという風で、全く人間味たっぷりの人であったとなつかしんでいます。安部磯雄氏はまた、先生を、温かき優美なる感情の人と述べています。先生はいま亡く、歴史的人物であり、先生を知る人びとの遺された言葉によって推測する外はありませんが、先生は情熱にあふれ、人間性ゆたかな品位ある愛の人であったと思います。

先生が永眠されて一〇〇年の間、同志社の歩みました道程は決して安穩ではありませんでした。先生ご存命のころから、徴兵猶予が私立学校には適用されず生徒数の減少を来しておりました。国家主義思潮の胎動は同志社のキリスト教主義教育の根幹をも危うくすることとなりました。一八九八（明治三一）年、同志社通則のうち綱領に関する不易の条項を変更し徴兵猶予の特典をうけました。つづいて翌年、それを復元しましたが、同年、政府は文部省訓令第一二号を公示し、宗教と教育の分離の名においてキリスト教主義学校の抑圧にのり出しました。この訓令の違反は徴兵猶予の特典、上級学校や官吏任用の受験資格を失うこととなり、同志社をはじめ全国のキリスト教主義学校を恐慌の坩堝のなかにおとし入れられました。そして一九四五年まで苦難にみちた長い道を歩まねばなりません。小崎弘道社長時代のには宣教師団の引き上げがあり、アメリカン・ボードとの対決は決定的なものとなりました。また、経営的困難は下村孝太郎社長時代に同志社病院、京都看病婦学校、波理須理化学学校の廃止がつづきました。しかし、このような苛酷ともいふべき歩みのなかに、一九〇四（明治三七）年、専門学校令による私立同志社専門学校を設置し、一九一二（明治四五）年には専門学校令による同志社大学と同志社女学校専門学部を開設、すすんで一九二〇（大

正九)年大学令による同志社大学を開学しました。この年は先生没後三〇年であり、わが国に一つのキリスト教主義大学を設立するという先生の壮大なる遺志が実現したのであります。戦後、一九四七(昭和二二)年に新学制による同志社中学校、高等学校、女子中学校、高等学校を開設、加えて幼稚園を法人所管とし、つづいて新制大学、女子大学を開設、一九五〇(昭和二五)年、没後六〇年には大学院の設置を見、さらに香里中学校、高等学校が開設され、一九八〇(昭和五五)年、先生没後九〇年に国際高等学校の開校、そして、一九八六(昭和六一)年に大学、女子大学は田辺校地において授業を開始し、女子大学短期大学部、国際中学校を開設して、先生没後一〇〇年の今日に至りました。現在、学校法人同志社は一二の学校を設置し、一、三〇〇余名の専任教職員と三一、〇〇〇名に及ぶ学生生徒園児を擁しています。そして二五〇、〇〇〇名にのぼる男女卒業生、校友同窓を輩出しました。ことに新島先生の没後、校友同窓は教職員とともに流転浮沈する同志社を支え守り、キリスト教主義学園たる真髓の発露のためにその力を傾注してまいりました。

湯浅八郎元総長は新島襄先生長逝のあと、同志社の責任を分担した金森通倫、小崎弘道、徳富猪一郎の三氏にあてて書き送られた勝海舟書簡にふれておられます。これを抄録されて

「今日行掛之大業跡々を踏締候は不可言六カ敷ものに候間 諸君御深慮有之 百難重りに到候事と御覚悟専一と存候 小拙は迄難危之衝に当り 唯々一誠字不撓之心得に而 内外我が負担するもの悉く矛盾と心得居 漸く廿余年を経過し猶如一日の思を成申候次第 後善の策も甚六カ敷 案外の事も生候もの」とあります。そして同志社の総長室で幾度かこれを涙読して独りひそかに戒められ、慰められ、励まされたと書いておられます。勝海舟は温かい友情をもって新島先生を追憶し、同志社の将来に心をかけました。そして先生の遺業を継ぐ方がたに對し、これから新島先生の大業をあ

とあと踏みしめていかれることはまことにむずかしいことではありますが、よく深慮されて百難重なり来ることを覚悟して下さい。わたくしも難危の衝にあたってきましたが、内外には矛盾ばかりで、思いもかけない問題に直面してきましたと自分の体験から同志社の人たちを激励しています。この海舟の言葉は、いまも同志社の校友同窓、教職員をはじめ同志社を思う人びとになげかけられていると思います。先生が没せられてから一〇〇年、同志社は百難重りきたる苦渋にみちた難路を歩み、その間同志社は互いに力をあわせて今日をきざぎあげてまいりました。しかし人間の集りであるかぎり、そこには争いや憎しみそして利己的な行為と自己顕示、党派的な対立と意見の相克、判断の誤謬や遅滞もあつたでしょう。けれども同志社に連なる人びとはつねにそれをのりこえて耐え、新島先生が深く思い高く願われた教育理想に心を新しくし、その実現にはげんできたと思います。

新島先生の志は官許同志社英学校として開花し、そのキリスト教主義教育は天下の人物を数多く養成し、わが国の近代化に資するところまことに大でありました。その後一〇〇年、いま時代は変遷し、人類は新しい歴史にむかつてすすんでいます。われわれは新島先生の真摯なる祈りと願いとを再確認して、新しい時代に処する新しい同志社を形成するための精緻なる計画樹立と、強靱なる実行力をもたねばならないと思います。社内諸学校機関がそれぞれ自主的な活力に満たされるところに、予想される困窮の時代に向けて互いに相寄り相助け一つとなる努力をかさねたいと願っています。新島先生が念願されたキリスト教を徳育の基本とする教育理想は同志社不易の原則であります。先生永眠一〇〇年のときにあたり、清新なる思いをもって新島襄先生の精神を再認識し、一致して歩みつづけたいと存じます。

(同志社総長)

心をつくし 力をつくして

巽 悟朗

昨年六月五日と六日の両日、カナダのオタワで第二回国際証券業協会のコンファレンスがあった。これに出席する機会があったので、オタワに向かう途中、ポストンに立寄り、そこで一泊して、三日の朝九時にホテルを発ち、アーモストを訪れた。これまでは何度も訪米しながら、いつも日程の都合で尋ねることのできなかつたアーモストである。十一時にアーモストの町に着いたが、この日はちょうどアーモスト大学のリユニオンの当日で、わたくしにとつてはまことに幸運であった。アーモスト大学のすばらしいキャンパスについてはご存知の方も多いであろう。わたくしも土産話にいろいろの人に喋らせていただいた。ここでは、わたくしの強烈な印象をひとつだけ紹介することにしよう。

ところはアーモスト大学ジョンソン・チャペル、相手は新島先生。わたくしには期待もあつたし、ある種の緊張感もないではなかつた。というのは、わたくしは同志社高校に在学中から、ここに掲

げられている新島先生の肖像画については、たびたびきかされてきた。耳にたごができるほどきかされた話から、ジョンソン・チャペルの肖像画は清新潑らつとした若い新島先生として、わたくしの頭には焼きついていたのである。だから、わたくしがアーモスト大学の訪問でいちばん楽しみにしていたのはジョンソン・チャペルでの新島先生との対面であった。

肖像画の新島先生はうつむきかげんで、さびしそうにみえた。わたくしの眼には、新島先生は万斛の愁いを秘めているように映つたのである。わたくしにとつては大きな衝撃であった。百聞は一見にしかずではあつたが、考えるまでもなく、完全な、奇麗ごとづくめの話はあるはずがない。思ひやつれた若い新島先生でよかつたし、わたくしはそれをいとおしくさえ感じた。

新島先生は周知のように、狂気のような情熱なくしてはなしとげえなかつた仕事を遂行された。しかし、先生も人の子にちがいはない。意気消沈のときも、さびしいときもあつたであろう。オーテス・ケーリ教授によると、あの肖像画は当時の先生の友人たちの印象にもとづいて画かれたようだ。戦後、第一回の新島スカラーとしてアーモスト大学に学んだ経済学部の榊原胖夫教授も、わたくしが抱いたジョンソン・チャペルでの印象に、すぐに同意してくださったが、下を向いた新島先生については、アーモスト大学を訪ねた人も多いのに、これまで誰も教えてはくれなかつた。

アメリカへ上陸してからの新島先生は、裕福で、心暖かく、信仰のあつひとりの紳士にめぐりあつた。これはたいへんな幸運であつた。こうして新島先生には、日本人として最初にアメリカの大学を卒業したという名誉が与えられることにもなつた。アメリカは新島先生にとつて、最高最良の国であり、先生はアメリカに心酔し傾倒したが、それはアメリカが善であり、ピューリタニズムの本場ニューイングランドの清い生活に魅せられたからである。

しかし、一八六四年（元治元年）ただひとり函館の港から海外へ脱出したときの若い新島七三太は悲壮であった。アーモストの寮生としてふところは心細く、新島は毎晩寢床に入ると、「どうか私をみじめな状態のなかへ投げすてないでください」と神に祈ったのである。一八七一年、明治新政府から留学免許状と旅券を与えられるまで、国禁を犯したという意識も絶えず新島にまわりついていたことであろう。彼の心中には自由とキリスト教的文明への強烈なあこがれが渦巻いており、それだけ新政府の頑迷さにたいしてやり切れない気持ちも強かったにちがいない。若い新島にとつて、海の彼方の同胞は、闇のなかにうごめいているあわれな異教徒であり、闇をかえて光とするための自らの大志をとげたいと願いながらも、「学問教養を身につけずに帰るとすれば、人びとは私を犬か猫のようにみなすだろう」と思い悩んでもいたのである。

新島先生の肖像画とわたくしとのあいだにどんな空間がつくられ、どんな思いがわたくしの胸に去来したか。それに触れようとして筆を執ったわけではないが、秋も冬もさびしいニューイングランドで、国家をも超える価値の存在を感じながら、あれを思い、これに悩んで、「読書もできないし、何をしても楽しくない」と手紙を書き送った若き新島像を、わたくしは自分の胸によみがえらせていた。アーモストの人たちは、新島が自分たちの大学で学んだことを誇りとし、チャペルの正面にその額を掲げた。そして真珠湾が攻撃されたときも、アーモストの人たちはこの額を引きおろそうとはしなかった。

いま、本学では「新島先生永眠百周年・生誕百五十周年記念事業」が検討されている。笹田大学長を委員長とする委員会では協議の結果、新島旧邸の修復改築と旧第二寮の再建が事業計画の基本方針と定められた由。わたくしたちも全力をあげて協力し、これを推進しなければならぬ。それ

はそれとして、校友一同で一九九三年の生誕百五十周年を機にアーモスト大学のキャンパスに「同志社ハウス」(あるいは「新島ホール」)の寄贈を検討することは一考に値するであろう。新島先生と対面して、わたくしの胸に勃然とわいてきたのはこの思いである。

日本は大国となった。同志社も大きな大学になった。わたくしたち、新島先生が使命感に燃え、熱い祈りのなかで創設された学園に学んだ者が、いまなすべきことを、すなわちあの戦争中も新島先生の肖像画をおろそうとはしなかったアーモストの人たちに報いる道を、皆で考えてみてはどうだろうか。関係各位とご相談をし、十分ご意見を承わって検討をはじめ、新島先生生誕百五十周年までに計画を練りあげるようにしたい。

機は来たり、そして去る。機を失することのないように、心をつくし、思いをつくし、力をつくして、その実現を神に祈りたい。

(同志社校友会会長)

人間新島襄

望月満子

新島先生が米國留学中に啓示を受けられ、帰國後強い信仰を以て同志社を創立され、それが今や日本に於ける私立の学園としては五指に這入るまでになった。この間の先生の偉大さ、又はご苦労は研究されつくし、万人が知るところであり、私がとりあげられるようなものはない。折しも『新島襄全集第四巻』が出版され、これが書簡集であり夥しい量の手紙が掲載されており、歴史的有名な人へも多くの書簡が送られている。それをあれこれと読んでいるうちに私は先生のあまり知られていない面、先生の誠に必要な暖い一面にふれてみたいという気持を持つに至った。

新島先生は寺町丸太町上ルの邸宅に住んでおられたことは皆が知っているが明治一〇年頃には同志社もおちつき、新進気鋭の若者たちが先生宅に集まってよく先生のお話を聴いていた。その頃、同じ寺町通りで丸太町下ルの下御霊神社の真向いにお米屋さんがあり、先生のお家から百メートルほど南であつた。その主人の大澤善助さんという人がよく新島邸へお米を配達に行き、その度に先生のお話を小耳にはさんでいるうちにすっかり魅せられ感動し、遂に新島先生から離れられなく

なつてどこへもついて行くようになった。この人が聴いたことを書きのこしていたらよかつたと思う。善助氏は、女学校―当時は女紅場―が出来たとき、実は常に過去に於て京都で最も古い学校と言つて今の鴨沂高校の前身校が誇つていた女紅場と同志社のは僅か一年の差があるだけで、新島先生がいかに早くから女性の精神的教養の向上の必要性に気付いておられたかが窺えるのであるがこの女学校が出来ると、白い扉に囲まれた中に沢山の松の木を寄贈された。その名残の松は今も有終館の辺りに見ることが出来る。

新島先生は何とかして日本の社会にキリスト教を根づかせたいと思つておられたので京都では古い平安教会や後には洛陽教会、また、神戸に居られたときは神戸教会をはじめ神戸女学院などの結成に大いに力を貸され、活躍されたということであるが、こうしたときに常に先生に影の如くつきそつていたのが善助氏であつたということである。これは丁度英国で十八世後半に博学の師サミュエル・ジョンソン博士とジェームズ・ボズウエルとの関係によく以てている。博士の人格に魅せられたボズウエルは、常に博士につき従い、後に博士を知るに重要な意義ある『ジョンソン伝』を著した。善助氏のような人が、どれほど新島先生のご活躍に役立つかかわらないと思つて、氏は先生の伝記を書く代りに、自分の二代目をして自分の出来なかつたことを行わせ、同志社に大貢献をなさしめてゐる。この二代目が、大沢徳太郎氏である。

話は變つて攝津三田の元殿様であつた九鬼藩の当主でのち男爵になつた九鬼隆一に新島先生は丁重な書簡を送つておられる（新島襄全集同巻四二頁）がこの藩で家老であつた鈴木清とは特に親しく交つておられた。（同巻三九八頁）。お体がお弱かつた先生はこの手紙でも度度神戸の方へ休養に行かれた。九鬼氏はとても広い土地また美しい庭園をあちこちに持つておられ、先生もそうした所

で休養されていたと思われる、この書簡集の初めの頃にはこの地から出しておられる書簡が多い。この鈴木氏の家に一人の娘さんが居られ、先生はこの方に目をかけられ、この方と京都の善助氏の息子とを見合せたらどうだろうと考えられるようになり遂に月下氷人をかけて出られた。徳太郎氏は鈴木家のお嬢さんと結婚されたがこういういきさつである。わが同窓会に、会長・名誉会長と合わせて五〇年余をつくされ、度々多額の寄附もして下さった武間富貴さんはこのお二人の中のお嬢さんで父系からも母系からも新島先生と深い繋りを持っておられ、先生から見れば可愛いお孫さんのようなものである。神戸に一時おられた先生はよく鈴木家を訪れられ幼いお子様方とはよく遊ばれた。幸恵さんはそんなえらい先生とは露しらず、親しいおじさんとままごとをして遊んだ思出を語られたという。(幸恵さんは富貴さんの母)である。イエスのように先生は幼児を可愛がられたのである。

新島夫人もわが同窓会にとつては大事な方である。あの松平容保に従つて鶴ヶ城に籠城して奮戦されたという女丈夫であり、同志社に女学校が出来ると英語を教え、同窓会が設立されると会員、役員ついに会長になつてその活動に協力された。茶の湯がお好きで精進して奥儀までとられたが茶器には目がなく特に未亡人になられてからはよい茶器欲しさにお小遣が足りなかつたこともあるという。夫人は朝風呂が好きで毎朝五時に起きて風呂屋に行く、競争相手のながし夫人が先に来ていと、さつさと帰られたという。こういう伴侶を持たれた先生のご生活の一端を思い計れようと敢えて八重子夫人のことまで書き記した。

(同志社同窓会長)